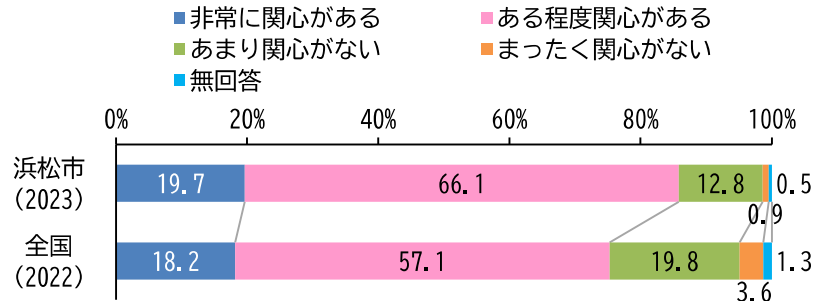


資料 8 市民・事業者・市民団体の意識

2023（令和 5）年度には、市民・事業者・市民団体を対象とした「生物多様性はままつ戦略に関するアンケート」を実施し、本市の自然環境や生物多様性に関する意識等を把握しました。

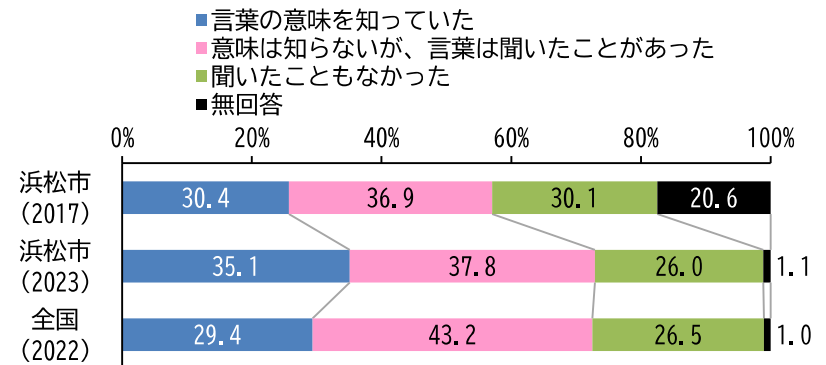
◆自然への関心度が高い

自然への関心度について全国と比較すると、「非常に興味がある」「ある程度関心がある」を合わせた「関心がある」という回答は、浜松市のほうが 10.5 ポイント高く、自然豊かな本市では、市民の自然への関心度が高いと考えられます。



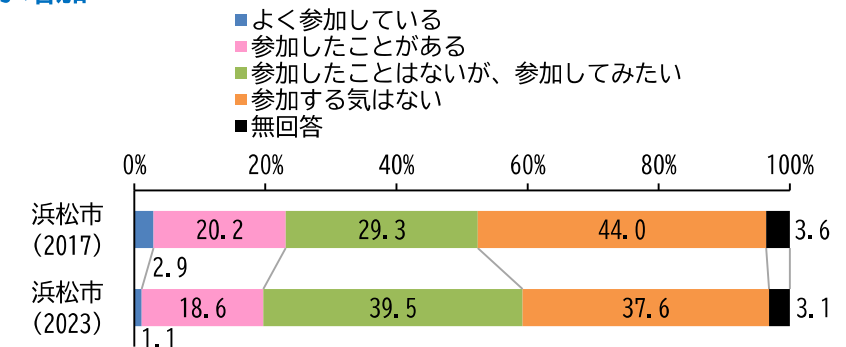
◆生物多様性の認知度が増加

「生物多様性」の言葉の認知度について過年度と比較すると、「言葉の意味を知っていた」が 4.7 ポイント増加していました。全国平均よりも 5.7 ポイント高いものの、「生物多様性」について理解している市民は全体の 3分の 1 に留まっています。



◆保全活動に参加したい人の割合が増加

生物多様性の保全活動の参加状況について 2017（平成 29）年度と比較すると、「参加したことはないが、参加してみたい」は、2023（令和 5）年度のほうが 10.2 ポイント高く、生物多様性の保全活動に参加してみたい人の割合が増加しています。

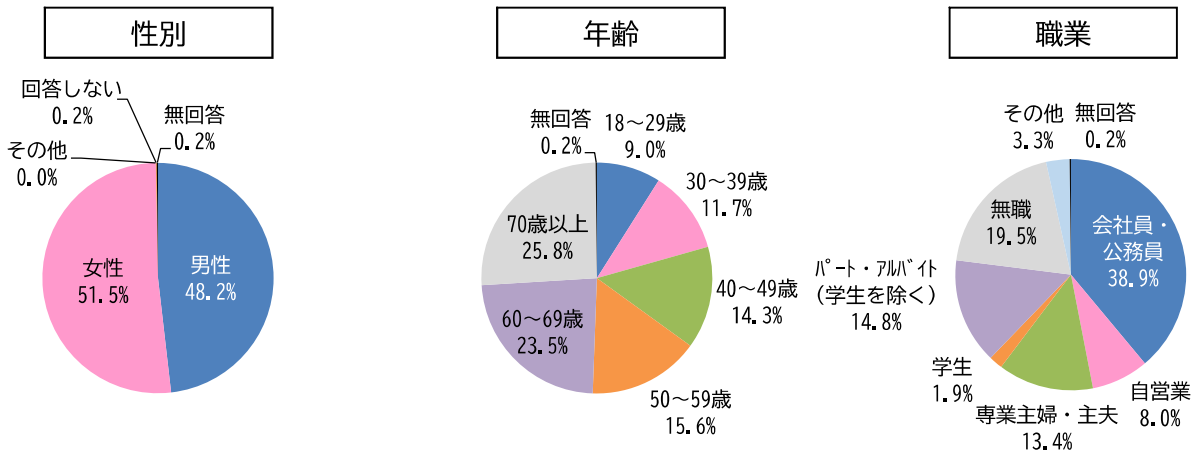


【その他のアンケート結果の概要】

- 外来種は、動物よりも植物（オオキンケイギク、メリケントキンソウなど）の認知度が低い。
- 地元で採れた旬の食材を味わうことで、生物多様性の保全に貢献したいと回答した市民が約 7 割にのぼる。浜松市は農業が盛んなまちであるため、生物多様性の保全と農業振興の両立が期待される。
- 重点的な取り組みとして、ごみのポイ捨て・不法投棄の防止、外来種の拡大防止、森林・里山の保全・管理、河川や海岸の清掃・海洋プラスチック対策が候補となる。
- 体力や時間がないこと、何をしたらよいのかよくわからないことが、市民の生物多様性保全活動を制限する要因になっている。
- 農作物や製品・サービスを購入することで、30by30目標*に取り組む企業を支援したい市民が多い。
- 企業の森・緑地、ビオトープ、公園で自然共生サイト*に登録できそうな事業者・市民団体がある。

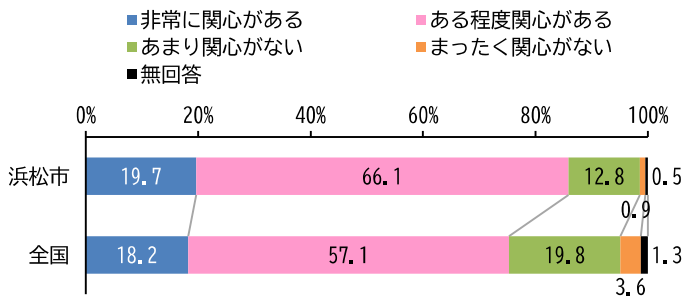
「生物多様性はままつ戦略に関するアンケート」
(2023(令和5)年5~6月実施)の概要

◇市民アンケート：回答率 36.2% (635 人/1,750 人)



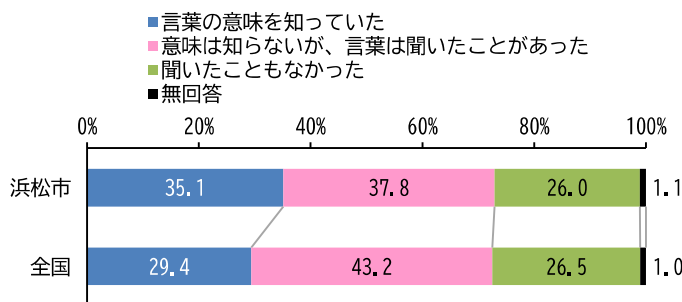
◇事業者・市民団体アンケート：回答率 55.7% (29 社・団体/52 社・団体)

①自然への関心度【市民】



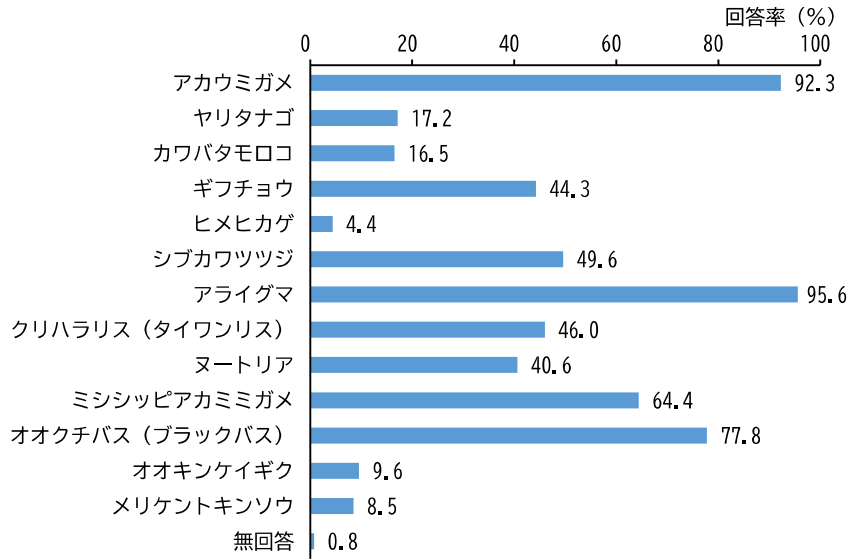
・自然への関心度について全国と比較すると、「非常に興味がある」「ある程度興味がある」を合わせた「関心がある」という回答は、浜松市のほうが10.5ポイント高い。
→自然豊かな浜松市では、市民の自然への関心度が高いと考えられる。

②言葉の認知度【市民】



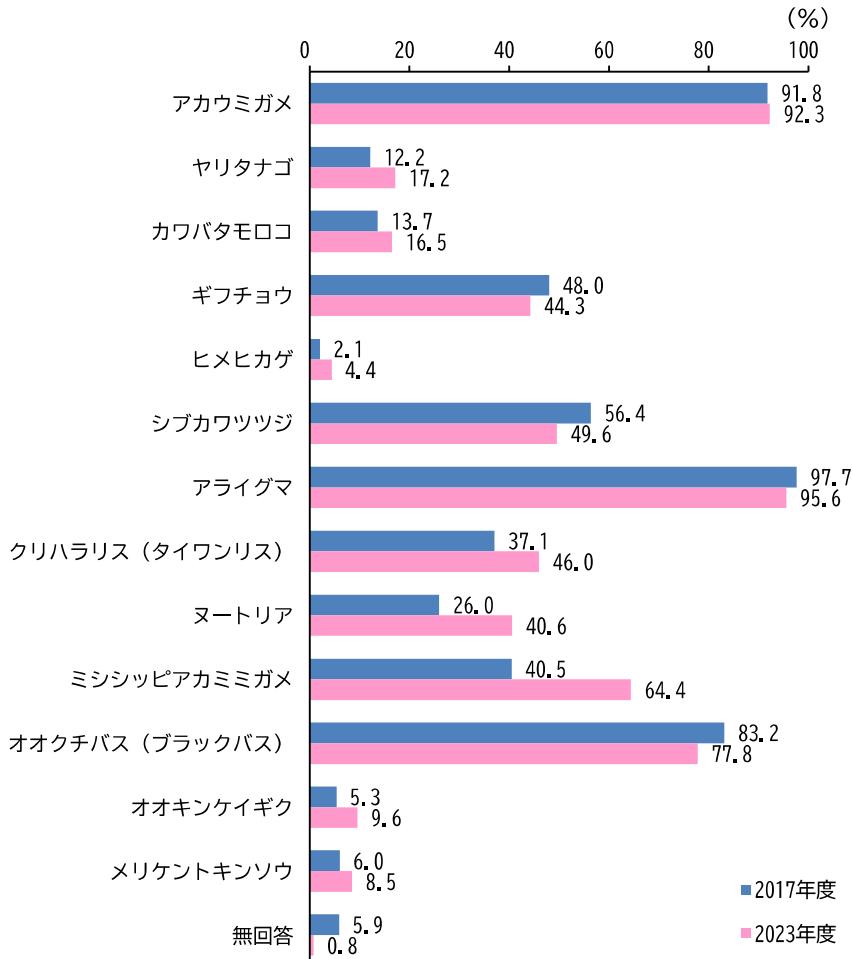
・「生物多様性」の言葉の意味について全国と比較すると、「言葉の意味を知っていた」は、浜松市のほうが5.7ポイント高い。
→生物多様性について、言葉も意味も知っている市民は全体の3分の1に留まっている。

③生物の認知度【市民】



- 生物の認知度は、「アライグマ」(95.6%)、「アカウミガメ」(92.3%)、「オオクチバス(ブラックバス)」(77.8%)、「ミシシippiaカミミガメ」(64.4%)などが高い。
- 外来植物の「オオキンケイギク」(9.6%)、「メリケントキンソウ」(8.5%)などは低い。

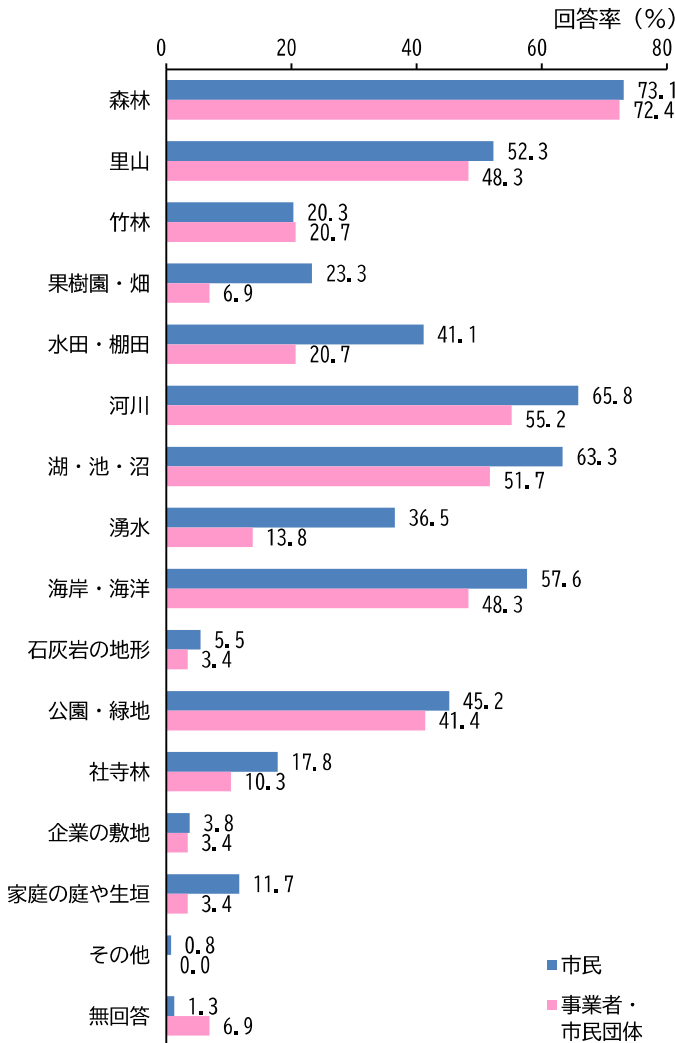
→外来種は、動物に比べて植物の認知度が低い。



- 生物の認知度について2017(平成29)年度と比較すると、「ミシシippiaカミミガメ」(+23.9ポイント)、「ニートリア」(+14.6ポイント)、「クリハラリス(タイワンリス)」(+8.9ポイント)などは多くなっている。

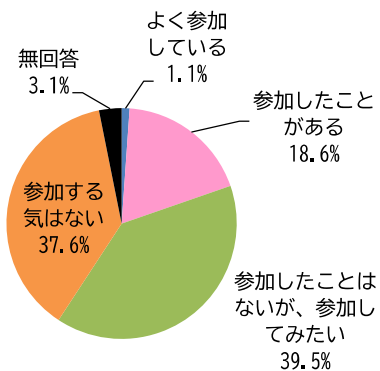
→ミシシippiaカミミガメ、ニートリア、クリハラリス(タイワンリス)の認知度は過去と比べて高くなってきている。

④重点的に保全すべき環境・場所【市民、事業者・市民団体】



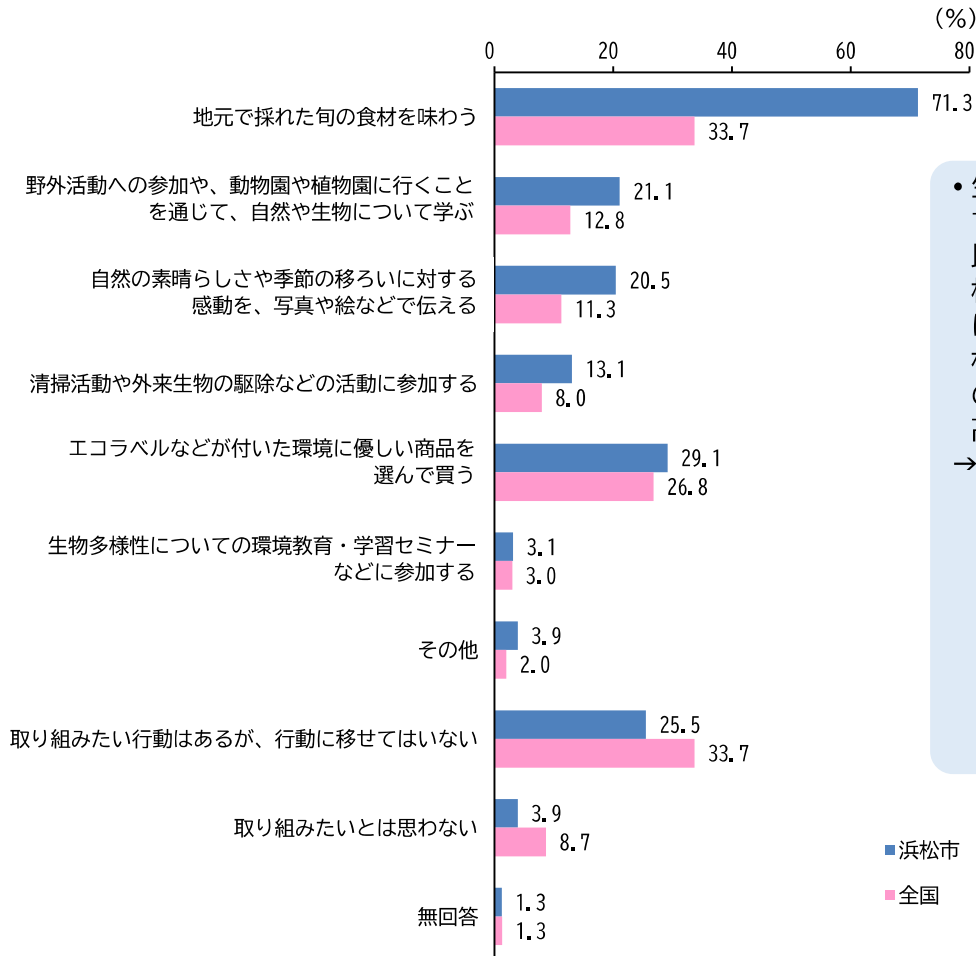
• 重点的に保全すべき環境・場所として、市民、事業者・市民団体ともに「森林」（市民 73.1%、事業者・市民団体 72.4%）、「河川」（市民 65.8%、事業者・市民団体 55.2%）、「湖・池・沼」（市民 63.3%、事業者・市民団体 51.7%）が多い。
→市民、事業者・市民団体は、森林、河川、湖・池・沼などを重点的に保全したいと考えている。

⑤生物多様性の保全活動の参加状況【市民】



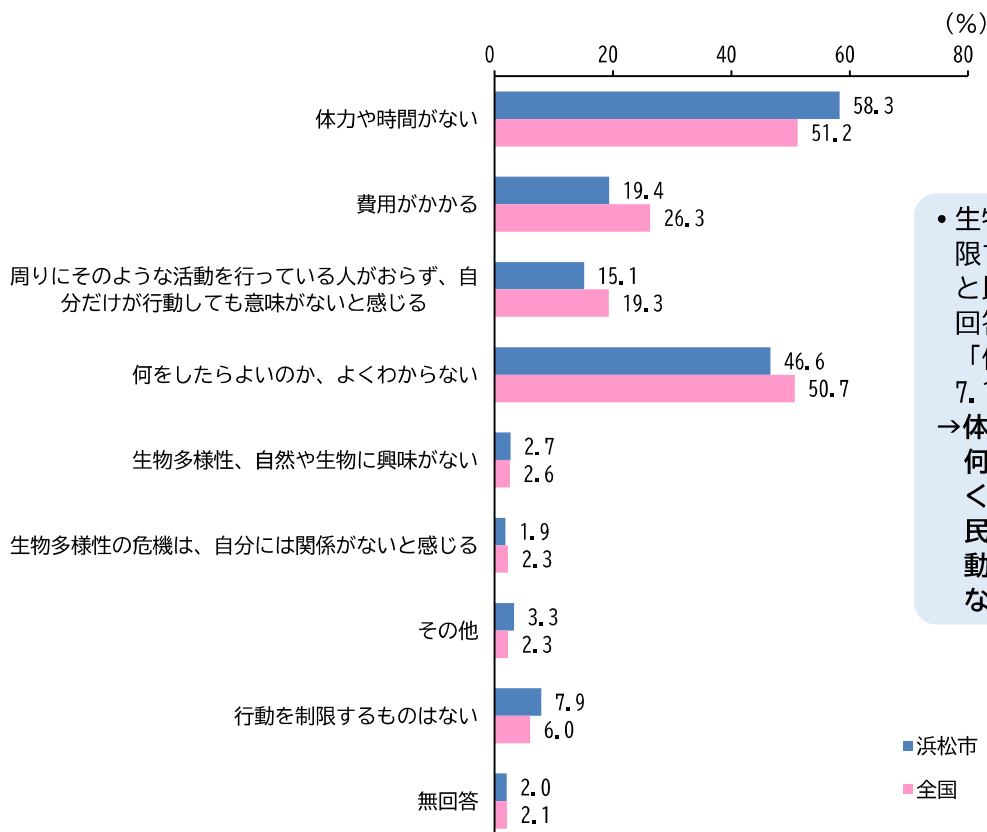
• 生物多様性の保全活動の参加状況として、「参加したことはないが、参加してみたい」（39.5%）が最も多く、「参加したことがある」（18.6%）、「よく参加している」（1.1%）を合わせて約 2 割の市民が「参加している」「参加したことがある」と回答した。
→生物多様性の保全活動には、約 2 割の市民が参加したことがある。今後、参加してみたい市民は約 4 割いる。

⑥ 生物多様性の保全に貢献する行動【市民】



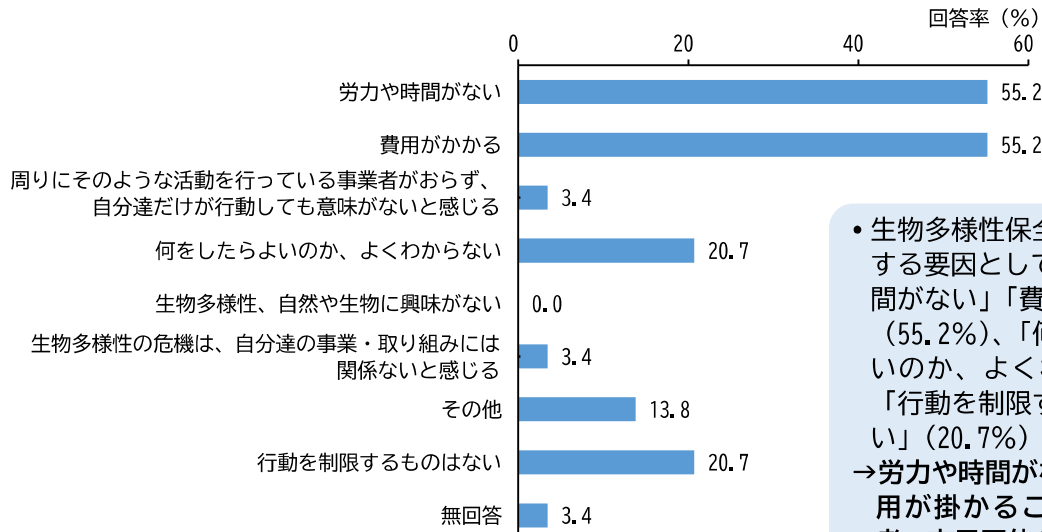
• 生物多様性の保全に貢献する行動について全国と比較すると、全体的に浜松市の回答率が高い。特に「地元で採れた旬の食材を味わう」は、浜松市のほうが 37.6 ポイント高い。
→ 地元で採れた旬の食材を味わうことで、生物多様性の保全に貢献したいと回答した市民が約 7 割にのぼる。浜松市は農業が盛んなまちであるため、生物多様性の保全と農業振興の両立が期待される。

⑦ 生物多様性保全活動を制限する要因【市民】



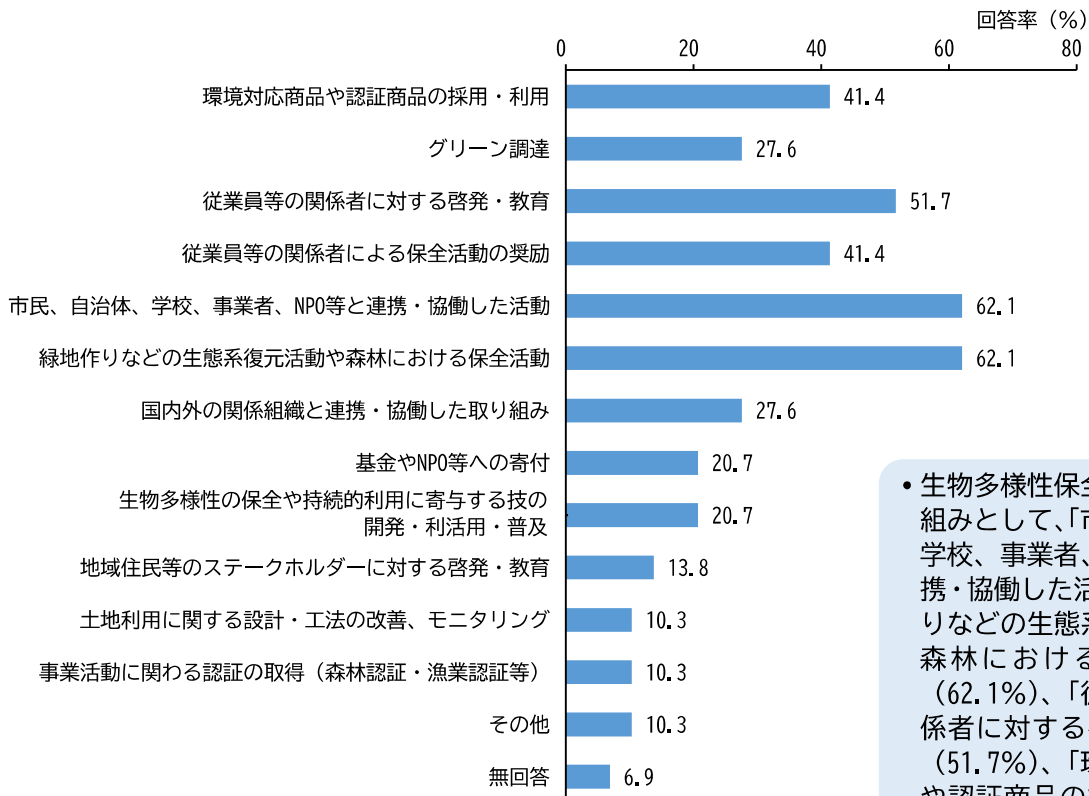
• 生物多様性保全活動を制限する要因について全国と比較すると、浜松市の回答率が高いものとして「体力や時間がない」が 7.1 ポイント高い。
→ 体力や時間がないこと、何をしたらよいのか、よくわからないことが、市民の生物多様性保全活動を制限する要因になっている。

⑧ 生物多様性保全活動を制限する要因【事業者・市民団体】



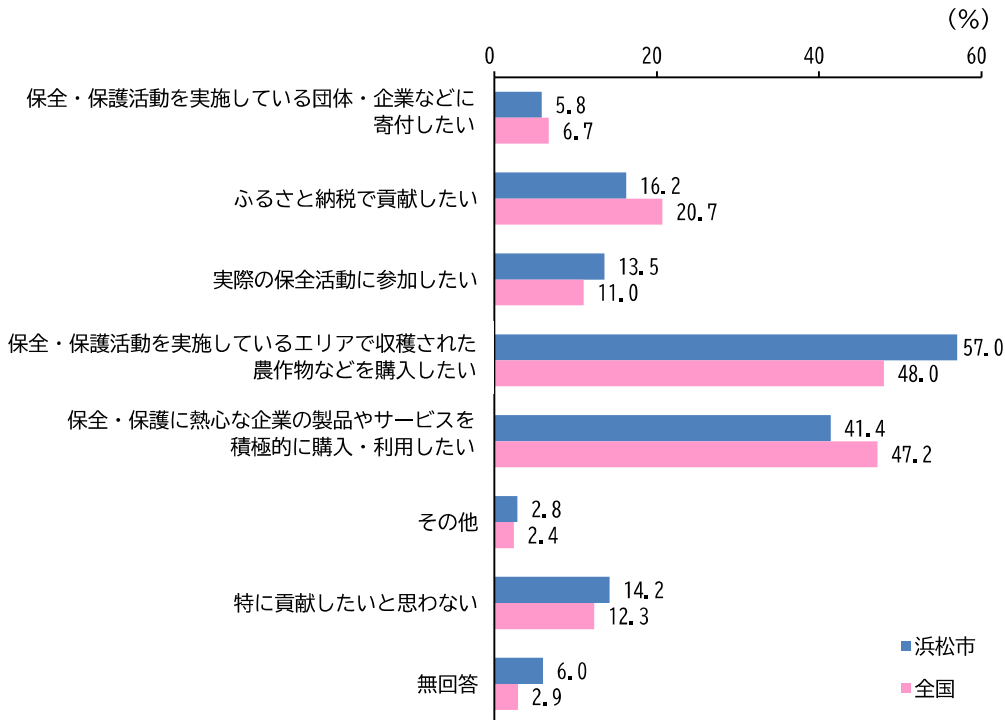
• 生物多様性保全活動を制限する要因として、「労力や時間がない」「費用がかかる」(55.2%)、「何をしたらよいのか、よくわからない」「行動を制限するものはない」(20.7%)が多い。
→ 労力や時間がないこと、費用が掛かることが、事業者・市民団体の生物多様性保全活動を制限する要因になっている。

⑨ 生物多様性保全活動の取り組み【事業者・市民団体】



• 生物多様性保全活動の取り組みとして、「市民、自治体、学校、事業者、NPO等と連携・協働した活動」「緑地作りなどの生態系復元活動や森林における保全活動」(62.1%)、「従業員等の関係者に対する啓発・教育」(51.7%)、「環境対応商品や認証商品の採用・利用」「従業員等の関係者による保全活動の奨励」(41.4%)が多い。
→ 事業者・市民団体が行っているのは、各主体との連携・協働、緑地や森林での活動などが多い。

⑩ 「30by30 目標」の目標達成に向けた取り組み【市民】

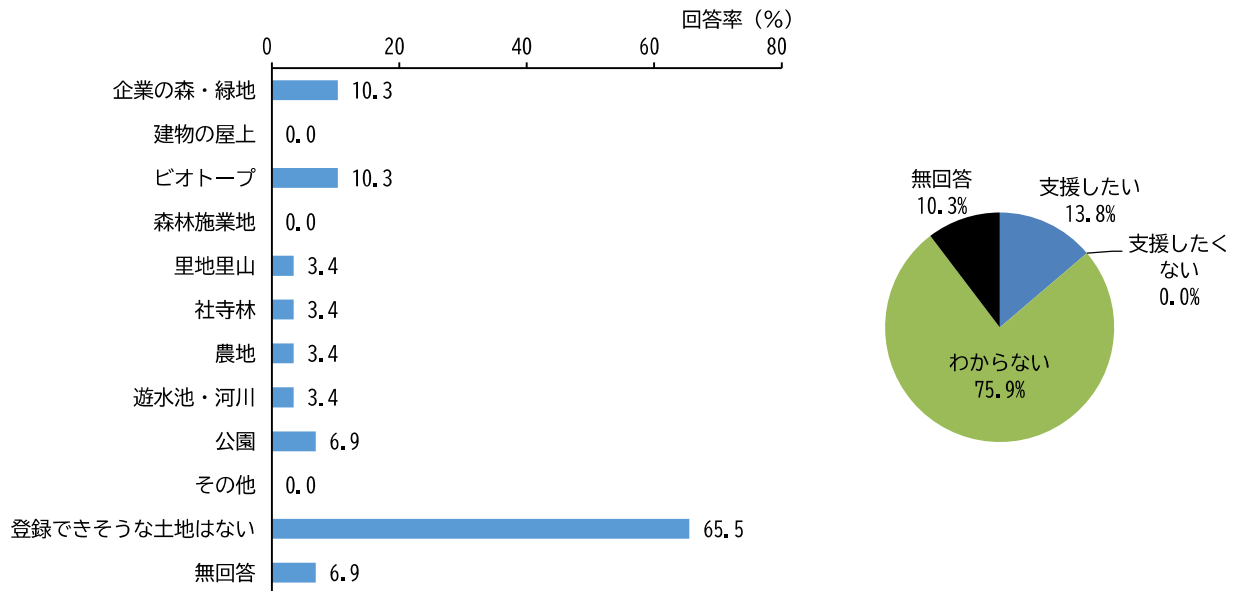


・「30by30 目標」の目標達成に向けた取り組み全国と比較すると、「保全・保護活動を実施しているエリアで収穫された農作物などを購入したい」は、浜松市のほうが 9.0 ポイント高い。
 →農作物や製品・サービスを購入することで、30by30 目標に取り組む企業を支援したい市民が多い。

⑪ 「30by30 目標」や「自然共生サイト」への参加意向【事業者・市民団体】

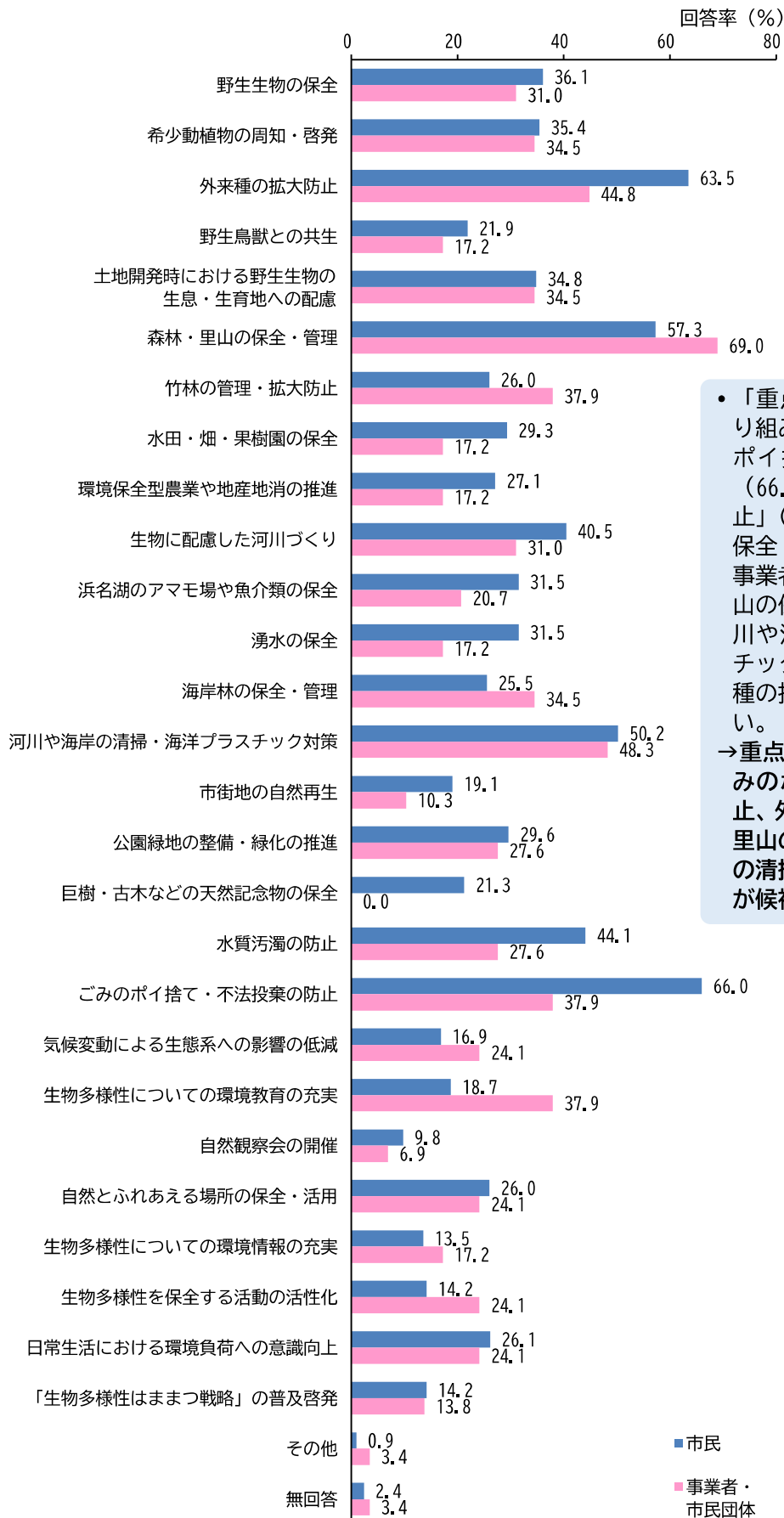
Q1 自然共生サイトに登録できそうな土地の有無

Q2 自己所有地以外の土地での共生サイトの登録に金銭的支援・人的支援をしたい意向



・「自然共生サイトに登録できそうな土地として、「登録できそうな土地はない」(65.5%) が最も多い。そのほか、「企業の森・緑地」「ビオトープ」(10.3%)、「公園」(6.9%) が多い。
 ・自己所有地以外の土地での共生サイトの登録支援として、「わからない」(75.9%) が最も多く、「支援したい」は 13.8%であった。
 →企業の森・緑地、ビオトープ、公園などで自然共生サイトに登録できそうな事業者・市民団体がある。

⑫重点的に行っていくべき取り組み【市民、事業者・市民団体】



・「重点的に行っていくべき取り組み」として、市民は「ごみのポイ捨て・不法投棄の防止」(66.0%)、「外来種の拡大防止」(63.5%)、「森林・里山の保全・管理」(57.3%)が多く、事業者・市民団体は「森林・里山の保全・管理」(69.0%)、「河川や海岸の清掃・海洋プラスチック対策」(48.3%)、「外来種の拡大防止」(44.8%)が多い。
 →重点的な取り組みとして、ごみのポイ捨て・不法投棄の防止、外来種の拡大防止、森林・里山の保全・管理、河川や海岸の清掃・海洋プラスチック対策が候補となる。

資料9 前戦略の評価

◆目標を達成している進捗管理指標は3つ

「生物多様性はままつ戦略2018」では、2022（令和4）年度を目標年度に3つの基本方針に沿った7つの取り組みについて指標を設定し、進捗を管理してきました。新型コロナウイルスの影響もあり、7つの指標のうち目標を達成したのは3指標に留まりました。

基本方針1 多様な生きものすみかをしっかりと守っていきます

取り組み	指標	基準値 (2016年度)	現状値 (2022年度)	目標値 (2022年度)	評価
①生きものの生息・生育場所の保全	ヤリタナゴの生息数	64個体 【成魚5 当歳魚59】	15個体 【成魚11 当歳魚4】	維持または 増加	×
②持続可能な農林水産業の促進と良好な生態系の保全	多面的機能支払交付金 ^{※1} の交付面積 ・農地維持 ・資源向上(共同) ・資源向上(長寿命化)	10,152ha 3,187ha 2,718ha 4,247ha	9,597ha 3,120ha 2,710ha 3,767ha	11,167ha 3,506ha 2,990ha 4,672ha	×
③都市における緑地・水域の保全と連結・拡充	緑地保全面積 ^{※2}	1,373ha	1,373ha	維持または 増加	○

※1：農業・農村は、国土の保全、水源の涵養、自然環境の保全などの多面的機能を有しており、この機能の維持・発揮を図るための地域の共同活動に対する支援に係る交付金を指す。

※2：特別緑地保全地区、風致地区、生産緑地地区、保存樹・保存樹林、市民の森の面積を合計したものの。

「①生きものの生息・生育場所の保全」では、2019（令和元）年度から北区の井伊谷小学校にて、地域の産業と自然のつながりを学ぶ「田んぼでつながる人と自然」のESDプログラムを実施し、静岡県指定希少野生動物に指定されているヤリタナゴの保全に取り組みました。2019（令和元）年9月、2021（令和3）年7月、2022（令和4）年9月、2023（令和5）年7月には、北区引佐町に整備した正楽寺ピオトープにて、井伊谷小学校児童によるヤリタナゴの放流会を開催しました。



ヤリタナゴ放流会の様子



ヤリタナゴ成魚

基本方針2 地域の生物多様性を守るための仕組みをつくります

取り組み	指標	基準値 (2016年度)	現状値 (2022年度)	目標値 (2022年度)	評価
④様々な主体との円滑な連携、活動支援	浜松市生きものパートナーシップの協定を締結した件数	0件	*3件	3件	○
⑤生物多様性に関わる情報の収集・蓄積・活用	市民参加型調査に参加した人数	0人/年	300人/年	300人/年	○

*2023年度までの締結件数

本市は広大な面積と、海・山・川などの自然があり、多くの市民団体が環境保全活動をされている一方で、こうした市民団体の担い手や活動費の不足が課題となっています。また、近年では事業者にとってもCSR*として環境保全への貢献が重要となってきています。そこで、「④様々な主体との円滑な連携、支援活動」の取り組みとして、浜松市生きものパートナーシップ協定制度を設け、市民団体・事業者・市の3者協定を、3件締結しました。

【協定①】

団 体：大栗安棚田倶楽部（天竜区にある大栗安の棚田の保全活動団体）
 事 業 者：株式会社アイエグゼック（ドローンの映像撮影、映像制作会社）
 協 定 日：2020（令和2）年1月
 協定内容：棚田を守るための担い手確保を目的としたPR動画を制作する
 市の役割：PR動画を市のホームページで紹介する等の広報への協力をする

【協定②】

団 体：NPO法人浜松市東区の自然と文化を残そう会（中央区にある十湖ビオトープ保護管理団体）
 事 業 者：大和ハウス工業株式会社 浜松支店（住宅総合メーカー）
 協 定 日：2021（令和3）年10月
 協定内容：十湖池ビオトープ維持管理のための作業を協働で行う
 市の役割：両者の取り組み及び広報に協力をする

【協定③】

団 体：正楽寺（水利組合を中心とした地元団体）
 事 業 者：辰美園（造園管理）
 協 定 日：2023（令和5）年4月
 協定内容：正楽寺ビオトープの保全に関する作業を協働で行う
 市の役割：活動の様子をホームページ、SNSなどで情報発信をする



大栗安棚田



十湖池ビオトープ



正楽寺ビオトープ

「⑤生物多様性に関わる情報の収集・蓄積・活用」では、市民参加型調査として、身近な生きもの「ツバメ類、カエル類、赤トンボ類」の写真スマートフォン等で撮影しメールで送信してもらいました。参加数を増やす取り組みとして、アンケート形式、インターネット入力フォームでの投稿も追加しました。2022（令和4）年度には、291人から300件の投稿があり、目標値を達成しました。



投稿されたツバメ



投稿されたトノサマガエル



投稿されたアカトンボ

基本方針3 豊かな自然と恵みを将来につなぐための人を増やしていきます

取り組み	指標	基準値 (2016年度)	現状値 (2022年度)	目標値 (2022年度)	評価
⑥地域の生態系を支える人づくり	環境学習指導者による生物多様性保全学習会の開催・参加回数	1,803回/年	1,181回/年	1,983回/年	×
⑦生物多様性の大切さを理解し、行動する市民の育成	「生物多様性」の理解度（言葉も意味も知っている）	30.4% (2017)	29.2%	60%以上	×

「⑥地域の生態系を支える人づくり」では、新型コロナウイルスの影響により、環境学習指導者を保育園、学校、団体等に講師として派遣する移動環境教室の開催件数や各指導者の自主的な学習会の開催や環境活動への参加が減少したことにより、「環境学習指導者による生物多様性保全学習会の開催・参加回数」は基準値を下回りました。

「⑦生物多様性の大切さを理解し、行動する市民の育成」では、生物多様性の理解度を指標としていますが、「言葉も意味も知っている」人の割合は目標値に届きませんでした。国の世論調査では29.4%、静岡県の世論調査では26.5%であり、全国的に認知度が低い傾向にあり、生物多様性に関する認識や理解は、まだ十分に進んでいない状況にあります。

資料 10 策定の経緯・策定組織

10-1 策定の経緯

年月日	会議
2023年7月27日	第1回生物多様性はままつ戦略2024策定部会
2023年8月29日	第1回浜松市環境審議会
2023年10月2日	第2回生物多様性はままつ戦略2024策定部会
2023年10月23日	第2回浜松市環境審議会
2024年1月19日	第3回生物多様性はままつ戦略2024策定部会
2024年2月22日	第3回浜松市環境審議会

10-2 策定組織

■生物多様性はままつ戦略2024策定部会

	氏名（敬称略）	所属
審議会委員	准教授 中村 俊哉	学校法人常葉大学 健康プロデュース学部 こども健康学科
	准教授 石川 春乃	学校法人静岡理工科大学 理工学部 建築学科
	理事 藤森 文臣	遠州自然研究会
	幹事 渡邊 記余子	浜松商工会議所
専門委員	教授 岸本 年郎	ふじのくに地球環境史ミュージアム
	教授 香坂 玲	国立大学法人東京大学大学院 農学生命科学研究科
	会長 芥川 知孝	はまなこ環境ネットワーク
	事務局長 廣瀬 稔也	NPO 法人ひずるしい鎮玉
オブザーバー	主任 齋藤 剛	静岡県くらし・環境部環境局自然保護課 自然保護班